

【暗証聖句】「その人は言った。「お前の名はもうヤコブではなく、これからはイスラエルと呼ばれる。お前は神と人と闘って勝ったからだ。」創世記 32 : 29

【日・神と闘う】

ヤコブはラバンのもとを離れ、故郷に向けて出発します。故郷を離れてから 20 年の月日が経過していました。この間、愛する母リベカは亡くなってしまったと考えられています。リベカは、ヤコブが家を出る前に、頃合を見計らってヤコブを呼び寄せると約束していましたが、その約束は果たされることなく、また帰還したヤコブをリベカが迎えたという記事もないからです。さて、問題は兄エサウです。20 年の間にヤコブに対する憎しみは和らいでいることを期待したことでしょう。ところが、ヤコブのもとに、兄エサウが 400 人もの人たちを引き連れてやってきているという情報を得ます（創世記 32 : 7）。これは尋常ではありません。そこでヤコブはもしエサウが攻めてきたとしても被害を少しでも抑えるために、「連れてくる人々を、羊、牛、らくだなどと共に二組に分け」（創世記 32 : 8）ます。そして、ヤコブは主に「兄エサウの手から救ってください。わたしは兄が恐ろしいのです」と祈ります。ヤコブは主に次の 2 点を訴えました。

- ・主が「生まれ故郷に帰りなさい。わたしはあなたに幸いを与える」と言われたこと（創世記 32 : 10）。
- ・主がかつて、「わたしは必ずあなたに幸いを与え、あなたの子孫を海辺の砂のように数えきれないほど多くする」と約束されたこと（創世記 32 章 13 節）。

その後、ヤコブはエサウに多くの贈り物を届けさせます。つまり、主に祈りながらも、自らの力で救いを得ようとしているわけです。しかし、それでも不安はおさまらず、「二人の妻と二人の側女、それに十一人の子供を連れてヤコブの渡しを渡」（創世記 32 : 23）らせて安全な場所に移し、自分一人だけがそこに残ります。そして、その夜、何者かと夜明けまで格闘するのです（創世記 32 : 25）。突然の展開に驚かされますが、これは壮絶な祈りを表しています。「何者か」とありますが、口語訳では「ひとりの人」と訳されており、この表現は神様の臨在を表す特別な暗示であり、つまりヤコブは受肉前のキリストと闘ったのです。また、「夜明けまで」とあるように、祈りが聞かれたと確信するまで、ヤコブは祈りを止めなかったことがわかります。これがヤコブの祈りです。

戦いは長く続き、ついに「その人はヤコブに勝てないとみて、ヤコブの腿の関節を打ったので、格闘をしているうちに腿の関節がはず」（創世記 32:26）します。主がヤコブに勝てないとはどういうことでしょうか。主は力づくで私たちを打ち負かすことはなさいません。人が心から砕かれて、自分自身を主に完全に明け渡すようになることが、主の勝利なのです。つまり、ヤコブはまだ砕かれていない。完全に自分を明け渡そうとしていないということを表しています。そこで主はヤコブの腿の関節を打つのです。自分の力で立っていることができなくなり、跪くようになってしまうこととなります。これこそ正しい神と人との姿なのです。

主は「もう去らせてくれ。夜が明けてしまうから」と言いますが、ヤコブは「いいえ、祝福してくださるまでは離れません」（創世記 32:27）と、主にしがみつき離そうとしません。つまり祈りがきかれるまで祈りを止めないということ。すると主は「お前の名は何というのか」と尋ねるのです。ヤコブは自分の名前を答えるのですが、主がヤコブの名前を知らないはずはありません。主はわざと名前を言わせたのでしょう。「ヤコブ」、それは「人を出し抜き、人を押しつけるもの」という意味でした。その名の通り生きてきた結果が、今なのです。ヤコブは自分の名前を答えながらも、それは罪の告白となっていたのです。ヤコブはそのことを身に染みて感じたことでしょうか。するとそのとき、「あなたの名はもうヤコブとは呼ばれない。イスラエルだ。あなたは神と戦い、人と戦って、勝ったからだ」（創世記 32 : 29）と主は宣言されたのです。「イスラエル」とは、「神が支配したもう」という意味です。「お前は神と人と闘って勝ったからだ」と主は言われましたが、この「勝った」とは、すでに述べた通り、自分の弱さを認め、神様に支配される者となったことを意味しています。

【月・兄弟の再会】

20 年ぶりにヤコブはエサウに再会です。ヤコブはエサウに向かって七度地にひれ伏しながら近づいていきます。これは当時、王の前に歩み出るときの行為でした。ヤコブはエサウに畏敬の念を示したのです。すると、「エサウは走って来てヤコブを迎え、抱き締め、首を抱えて口づけし、共に泣いた」（創世記 33:4）のです。エサウの憎しみは、すでに消えていました。主がヤコブの祈りに答えてくださり、エサウの心を柔らかかにくださったのです。もちろん、双子の兄弟です。エサウも 20 年ぶりに弟に会うことができ、うれしいという気持ちもあったことでしょうか。ヤコブはエサウに対して「兄上のお顔は、わたしには神の御顔のように見えます。このわたしを温かく迎えてくださったのですから」（創世記 33 : 10）と言います。「温かく迎え」という言葉は、神様によって赦されるという意味がある言葉です。

【火・ディナの辱め】

ヤコブがシケムに移り住んだあと、大事件が発生します。レアとヤコブとの間に生まれた娘のディナが、土地の娘に会いに行った際に、その土地の首長であるヒビ人ハモルの息子シケムからレイプされてしまうのです。その後、シケ

ムはディナを好きなり、結婚を申し込み、そのために割礼をしても良いとまで言います。ところが、妹がレイプされたことを知ったシメオンとユダは、シケムを許すことができず、嘘をついて復讐するのです。その復讐はシケムだけでなく、町の他の男たちにまで及びます。男性に割礼をさせ、傷んで動けなくなっているところを襲い、虐殺したのでした。いくら妹が辱められたとはいえ、このような残酷なことがなぜできるのでしょうか。ところがこのような状況にもかかわらず、ヤコブの心配は自分の平和な生活が脅かされることでした。ヤコブは子どもたちにこう言います。

「困ったことをしてくれたものだ。わたしはこの土地に住むカナン人やペリジ人の憎まれ者になり、のけ者になってしまった。こちらは少人数なのだから、彼らが集まって攻撃してきたら、わたしも家族も滅ぼされてしまうのではないか」創世記 34 章 30 節

すると、シメオンとユダは、「わたしたちの妹が娼婦のように扱われてもかまわないのですか」と言って、全く罪を犯した自覚がないようでした。

この聖書の記事の中でも、目をそむけたくなるような事件が発生してしまった背景に、ヤコブの子育ての問題があったように思います。ヤコブの物語は、常に自分を中心として展開してきました。ここでも自分の平和ばかりを気にしています。ヤコブはエサウの問題が解決したのもつかの間、とんでもない家族の問題を抱えてしまったのでした。

【水・はびこる群像礼拝】

シケムにこれ以上いることができなくなったヤコブに、主は「さあ、ベテルに上り、そこに住みなさい」（創世記 35:1）と言われます。ベテルは主が最初にヤコブに現れた場所でした。いわばヤコブの信仰の旅の出発点でした。そのベテルに上りなさいと言われたわけですが、上る（アラー）は、しばしば巡礼を意味しました。多くの苦難の中で、私たちは神にしか解決はないと、神様を求め、神様を巡礼するのです。そして、「そこに住みなさい」と言われていますが、この言葉は、「とどまりなさい」ということ。巡礼したあと、元の世界に帰るのではなく、そこにいつまでも住むことが大切なのです。ヤコブの信仰の出発点は、同時に信仰の終着点ともなるのでした。

主は、そこで2つの重要ななすべきことを伝えます。それは「神様のための祭壇を造れ」ということと、「身に着けている外国の神々を取り去り」されということでした。ベテルに戻り、そこから家族が一つとなって心新たに再出発するにあたって、偶像を捨て、神様だけを礼拝することが何よりも大切なこととして教えられたのでした。その後、「神様が周囲の町々を恐れさせたので、ヤコブの息子たちを追跡する者はなかった」（創世記 35:5）とあります。いつ追っ手が復讐にやってきても不思議ではない状況でしたが、神様が周囲の町々を恐れさせてくださったので、誰もおってくるものはありませんでした。ヤコブの息子たちの行為は正しいものではなかったにも関わらず、神様は守ってくださったのです。

【木・ラケルの死】

ベテルを出発した後、三つのことが立て続けに起こります。それは「ベニヤミンの誕生」「ラケルの死」「ルベンの姦淫」です。エフラタ（ベツレヘム）まで行く途中で、産気づきます。そして産まれたのがベニヤミンでしたが、ラケルは、出産に際して全生命力を使い果たしてしまいます。ラケルは、苦しみの子という意味の「ベン・オニ」と名付けようとしますが、ヤコブは「幸いの子」という意味で、「ベニヤミン」と名付けます。直訳は「右手の子」。右の手は力を表す。ラケルを失った悲しみとその命の代償として与えられた子であるがゆえに、ヤコブが支えと慰めを与えてくれる子ということ。そこからヤコブに幸いをもたらしてくれる子という意味になる。また、イエス様がお生まれになったベツレヘムに行く途中で生まれたというのにも意味があるのかもしれませんが。このようなラケルの死とベニヤミンの誕生、つまり家族が悲しみと喜びが入り混じっている状況の中で、長男のルベンが、あろうことか父の側女であり、ダンとナフタリの母でもあるビルハと姦淫を犯してしまいます。この結果、ルベンは長子の特権を失ってしまいます。

歴代誌上 5:1、2「イスラエルの長男ルベンの子孫について。ルベンは長男であったが、父の寝床を汚したので、長子の権利を同じイスラエルの子ヨセフの子孫に譲らねばならなかった。そのため彼は長男として登録されてはいない。彼の兄弟の中で最も勢力があったのはユダで、指導者もその子孫から出たが、長子の権利を得たのはヨセフである」

妻4人と12人の息子。家族関係はいよいよ複雑になっていきますが、このような問題だらけに思えるようなヤコブとその子供たちからイスラエルの12部族はひろがっていくのです。すべては神様のなさることです。

35:27 ヤコブは、キルヤト・アルバ、すなわちヘブロンにいた父イサクのところへ行った。そこは、イサクだけでなく、アブラハムも滞在していた所である。35:28 イサクの生涯は百八十年であった。35:29 イサクは息を引き取り、高齢のうちに満ち足りて死に、先祖の列に加えられた。息子のエサウとヤコブが彼を葬った。

ラケルの死後、ヤコブはキルヤテ・アルバ、今日のヘブロンにいた父イサクのところに行きます。マムレは、アブラハム以来、住み慣れた地であり、アブラハムは甥のロトと分かれてこの地に移住し（13:18）、この地で主の使いを迎えました（18:1）。サラに先立たれた時、アブラハムはこの地に墓地を購入した（23:19-20）のですが、イサクも老いの日々を、この地で過ごしたと思われまふ。ヤコブがこの地を訪れたのは、父の病状が伝えられたからかもしれません。父の家を飛び出したヤコブが、父イサクのもとに帰ったわけです。イサクは「長寿を全うして自分の民に加えられ」、最後はエサウとヤコブが二人で一緒にイサクを葬ります。